



題名 : (無題) 鯉つかみ
絵師 : 歌川豊国(三代)
年代 : 安政3年(1856年)
版元 : 太田屋多吉

夏の歌舞伎狂言として人気を博した「鯉つかみ」といわれるものの一つ。暑苦しい夏の日々、涼感を演出・表現するため、舞台上では本物の水を使うことがありました。この図は安政3年江戸森田座「菊累音家鏡(きくがさねゆずりのすがたみ)」から、鯉の精(着ぐるみ)と格闘を繰り広げる場面を描いています。それ以前は大道具として、水の場面を描いていたものが、本水を使用することで迫力が増し、バシヤリと水しぶきがあがるなど臨場感溢れる芝居に江戸っ子は拍手喝采となったのでは、と思わずにはられません。この臨場感を余すことなく錦絵に描いたのが、当代一の浮世絵師歌川豊国(三代)。波がうねり鯉が暴れまわるところ、かろうじて抑えつけた瞬間・・・斬りかかろうとする木下川幸助(右図)。まるで映画のワンシーンをカットしたかのような構図は浮世絵ならではの。